



くまもとの家庭教育

こどもの居場所づくりの現場から

令和8年熊本地震は、県内各地に甚大な被害をもたらしました。現在も、まだ断水が続く地域や避難所での生活を余儀なくされている方たちがおられます。そのような中、各地で「被災した子どもたちの居場所づくり」が実施され、子どもたちの心のケア、保護者の負担軽減など日常生活を取り戻すための家庭への大きな支援となっていました。いくつかの取組を紹介します。



【小野部田小】けん玉で遊ぶ子どもたち

【宇城市 小野部田小学校】

- ・「図書館や教室を子どもたちに開放できないか」という教職員の声がきっかけとなり開設。三重県学校支援チームと国際協力N G O「ワールド・ビジョン・ジャパン」が連携して運営。
- ・子どもたちは友だちや先生、スタッフと交流することができ、次第に元気や明るさを取り戻している。
- ・体験活動ボランティア派遣事業（県社会教育課）を活用し、国立阿蘇青少年の家等から講師を派遣してもらい、子どもたちに体験活動を提供した。
- ・読書やカードゲーム、けん玉（オンラインで北海道の講師が協力）等で楽しく活動していた。かき氷等のおやつも子どもたちの楽しみ。

【八代市 旧植柳幼稚園】

- ・認定N P O法人「カタリバ」が運営。地域ボランティア、高校生ボランティアも協力。（Facebook等のS N Sで呼びかけ）
- ・訪問した日は、幼児から高校生まで40名の子どもたちが集まっていた。地域のボランティアの方により音楽の演奏も行われた。
- ・スタッフには、令和2年の熊本豪雨で被災した方もおられ、「恩返し」という思いから協力をされている。
- ・迎えに来られた保護者も、「共働きなのでとても助かっている」とのこと。



【旧植柳幼稚園】みんなでおやつの時間



【みんなのこども部屋】
友だちと楽しく交流する子どもたち

【八代市 みんなのこども部屋 @松高コミュニティセンター】

- ・松高小P T A会長が中心となり活動を開始。保護者、地域ボランティア、高校生ボランティアがスタッフとして運営に協力。立ち上げの際に認定N P O法人「カタリバ」に相談し、運営のノウハウや支援を受ける。
- ・子どもが普段関わらない年齢のはなれた友達とも交流し、子どもの交友関係が広がった。（保護者談）
- ・松高コミュニティセンターが避難所になっており様々な立場の方（地域住民、警察、防災士、他県の応援職員等）と子どもたちが交流できた。

現場の声～運営に携わるスタッフの方々に聞きました～

- 子どもたち同士が同じ場で交流することによって、笑顔が増えてきた。この夏を「つらかった」だけにせずに「楽しかった」という思い出も作ってほしい。
- 子どもの心のケアは後回しにされがちだが、子どもが安心して過ごせる場所があってこそ親（保護者）の安心にもつながる。
- 子どもの居場所づくりを通じて親（保護者）も安心して集まり過ごせる場所も提供していけないか模索中。今後は、親（保護者）の心のケアも重要になってくる。
- このような場を通じ「家族以外の大人たちも守ってくれている（たくさんの人に守られているという安心感）」を子どもたちに持ってもらえたと思う。

いま、できることを～家庭教育支援員としての活動を通して～

令和8年熊本地震で、大きな被害を受けた氷川町。これまで氷川町で、地域活動に関わってこられた家庭教育支援員の古閑さんに町の現状やこれからの復旧・復興に向けた展望について伺いました。



【竜北東小学校の通学路点検】
教職員、PTA、学校運営協議会メンバー、区長さん等、地域住民が連帯し、安全確認を実施した。

【氷川町家庭教育支援員 古閑 由美 氏】

- ・氷川町の避難所や各学校を回り、情報収集や環境整備等に携わった。
 - ・これまでどおり、地域での日常の何気ない声掛けやあいさつを発災後も変わらずに心掛け、こども、保護者、地域住民とのつながりの中で互いの健康状態や安否を確認。
 - ・竜北東小学校の学校職員と「こどもの心のケア」に関する研修に参加。
 - ・11月実施予定の「CSの日（小中連携事業）」に向けて各校と連携し実施のための下準備を進めている。
- これからの復旧・復興には、地域の協力が欠かせない。地域住民が互いに支え合い、安心できる「地域のつながり」づくりを進めていきたい。

今後の展望～これから望まれる家庭教育支援について～

これから復旧が進み、ある程度生活が落ち着いた時に、たまっていた疲れやストレスが一気に表出する恐れがあるので、こどもも大人も心のケアが必要になってくる。民生委員さんと各家庭を回り、情報収集や心身のサポートを行ってきたい。

【自分自身が被災して改めて考えさせられたこと】

○災害にあった時のメンタルケアや傷ついている方への言葉かけ等の研修の機会がほしい。

○被災した時の互いの支え合いの在り方やサポートの仕方等についての研修も必要。

→「防災＋家庭教育」という視点でこれからの研修や活動を考えていく必要がある。

○くまもと「親の学び」プログラム 進行役養成講座 ～見方を変えることで～

参加者（主に保護者）が、これまでの親としての子どもに対する接し方を振り返り今後のそれらに関して新たな発見をすることと、新たなトレーナーの育成を目的にくまもと「親の学び」プログラム進行役養成講座を行いました。アイスブレイクで打ち解けた後、サイコロトークでさらにつながりをも深め、メインのプログラムに取り組みました。日常のある場面を取り上げ、ネガティブな関わり方とポジティブな関わり方について、グループで考えを出し合って互いに共感しました。

また、「叱る」と「怒る」の違いや「リフレーミング」について考え、「子どもの言動に対するとらえ方や視点を少し変えることで、関わり方が変わる」ことを共有しました。さらに、思っている以上に親子が一緒に過ごすことができる時間は短いことを再確認し、今後について深く考える時間となりました。

以下、参加者の声です。

「ネガティブな言葉をポジティブに変えることで、子どもも自分も気持ち良くなると思った。」「他の方と話をして、“ほっこり”した気分になり、安心感が得られた。」「子どもとの関わり方について、自分を振り返るいい機会となった。」「保護者の笑顔と元気が、子どもの笑顔と元気につながることを意識したい。」

参加された方々には、この講座を通して、「親の学び」の大切さを実感し広めてもらい、上益城郡内の児童生徒の健やかな成長に繋げてほしいと思います。（原稿作成：上益城教育事務所）



【お問合せ】熊本市町村教育局社会教育課 家庭教育支援班

T E L : 096-333-2697

E-mail : shakaikyoku@pref.kumamoto.lg.jp